

ケルトの浦島物語「常若の国のアシーン」

01E083 和田寛子

はじめに

浦島太郎の物語は私たち日本人にとって身近で、誰でも耳にしたことがある昔話のひとつだ。ケルト人の住む地にはこの浦島太郎と非常によく似た伝説が数多く残されている⁽¹⁾。とりわけ「常若の国のアシーン」という伝説は浦島太郎の物語との類似点が多く、重複するポイントが驚くほどある。次にあげるのは「常若の国のアシーン」のあらすじである。

アシーンはエリン(アイルランド)の国随一の勇者で優れた詩人だった。常若の国の王女である美女ニアヴがやってきて、アシーンを夫に迎えたいといい、二人は伝説の楽園常若の国へと旅立つ。白馬で海を越え、楽園にたどり着いたアシーンとニアヴは300年間夢のような暮らしを送るが、やがて望郷の想いに駆られたアシーンが帰郷を望むと、ニアヴは「戻ってきたければ、決して馬から降りてはいけない」と忠告し、帰郷を許す。故国に帰ったアシーンは、不注意から大地に降りてしまう。すると、馬は一瞬のうちに消え去り、とたんにアシーンの体は300歳の老人になってしまう⁽²⁾。

ケルト人は文字化された知識体系を残さなかったが、神話や伝説は口承によって多く伝えられている。しかし、口承のためか現代に至るまでにもとの話からさまざまに変形したようである。古い伝承ではニアヴが豚の顔であられる話や、アシーンが老人になるのではなくその場で灰になって崩れ去ってしまう話や、小さく縮んで煙か霧のように掻き消えてしまうという話も伝えられている⁽³⁾。後の時代の話では、アシーンは再び常若の国へ帰ってニアヴと今でも楽しく暮らしているという。

次に、浦島太郎のあらすじもあげてみる。

ある日、浦島太郎という漁師が浜辺で亀を助け、そのお礼として竜宮城へ案内される。竜宮城では美しい乙姫にもてなされ、毎日うっとり暮らししていたが、三日目に家に残してきた母親を思い出して急に帰りたくなってしまった。乙姫は引き止めても聞かない太郎に、美しい箱を渡して「これは玉手箱です。どんなことがあっても開けてはいけません」と言った。太郎が浜辺へ戻ると、竜宮城にいたあいだに地上では百年も経ってしまったことがわかり、さびしさのあまり玉手箱を開けてしまう。すると、箱の中から煙が立ちのぼり太郎はあっというまによぼよぼの老人になってしまった⁽⁴⁾。

上にあげた浦島太郎の話は日本昔話として一般に知られている話だが、神話・伝説として全国各地に諸説ある伝承が基になっていて、地域や時代によってバリエーションに富んでいる。しかし、変わらず共通している点がいくつか含まれている。その共通点は以下の3点にまとめられる。

- (1) 美しい女性の登場
- (2) この世とは時間の流れが異なる世界への訪問
- (3) 主人公が禁忌を犯す

この3点は「常若の国のアシーン」にも共通に含まれており、伝承や神話に盛り込まれるモチーフとして意味が深いものであることを感じさせる。

本稿では「常若の国のアシーン」を解釈するためのモチーフと、こういった伝説を持ったケルト人理解の背景となる歴史、宗教、死生観について、ギリシア・ローマの神話との比較も視野に入れて考察し、論じていく。

第1章 ケルトの歴史と宗教

1. ケルトの歴史

ケルト人はさまざまな謎に包まれ、いまだにわかっていないことがたくさんある。幾人もの学者の推測によって、ケルト人の始原地はドナウ川の近くであるとか、カスビ海の近くであるとか、いろいろな説がまことしやかに囁かれている。今日ではケルト人はゲルマン語族に属する言葉を話していた金髪で背が高い民族で、紀元前900年頃気候が悪くなったので本来の故郷を捨てて移動をはじめ、それから500年の間に各地へ散っていったとされている。

ケルト人の祖先と呼べるのは、最初の氷河期が終わった頃にヨーロッパの原野に移り住んできた人々だ。さまざまな民族がさまざまな言語を話していたが、彼らの話していた言語はまとめてインド・ヨーロッパ語族と分類されている。その中のケルト人の祖先となった部族はすでに鉄器を持ち、まだ青銅器を使っていた他の民族を征圧して、ヨーロッパを支配した。その後ケルト人はますます力をつけ、ローマやギリシアにも勢力を拡大した。まず紀元前387年にローマを占領し、次にギリシアへ目をつけた。当時ギリシアを支配していたのは、かの有名なアレクサンドロス大王だった。伝説によると、紀元前335年にケルトの使節がドナウ川で大王に謁見したとき、アレクサンドロス大王が「お前たちの一番恐れているものは何か」と聞いた。大王は、「あなた様です」という答えを期待していたが、ケルト人は「私たちはどんな人間も恐れない。ただ私たちが恐れるのは、空が私たちの上に落ちてこないかということだけだ」と答えたという。この伝説が真実であれば、彼らの世界観を見て取れる逸話で面白い。

ケルト人はアレクサンドロス大王が亡くなった後にギリシアのデルフォイを攻めたが、この侵攻は失敗に終わり、ローマからも追い出された。カルタゴでもハンニバルに敗れ、『ガリア戦記』で有名なガリアでの戦いにも敗北した。その後ヨーロッパ大陸にいたケルト人は領土を維持できなくなり、彼ら自身も彼らの文化も消えゆくしかなかった⁽⁵⁾。

イギリスは島国なので、大陸とはまったく異なった歴史があった。最初にイギリスに移り住んだ民族がなんだったのか、はっきりしたことはわかっていないが、先住民族はストーンヘンジやエイベリーなど、大きな石を積み上げた遺跡を残している。それから舟に乗ってやってきた大陸の民族に侵略され、その新しい民族も今ではケルト人にとってかわられた。

ローマ軍は二度にわたりイングランドに攻め込んだが、イングランドのケルト人はローマ軍を破った。しかし、後の皇帝クラウディオスの征服命令により、イングランドはとうとう占領された。ケルト人はほとんどが百姓か奴隷になったが、ローマ風の暮らしを受け入れて、抵抗することはなかった。ところが、ローマ人に徹底的に抵抗した民族もいた。今でいうスコットランドのハイランド地方に住んでいたピクト族とスコット族だった。ケルト人は彼らを野蛮と

嫌って、境界線に大きな壁を作ったほどだった。イングランドのケルト人は次第にローマに馴染み、「準市民」として約300年間平和に暮らした。

西暦367年、ピクト族とスコット族が壁を越えて侵略してきた。しかも、大陸からはサクソン人が攻めてきたが、本国ローマも国が傾いて崩壊を始めていたため助けも求められなかった。イングランドのローマ人は十数年抵抗していたが、ついに力尽き、イングランドを放棄して、その頃すでに東と西に分裂していたローマ帝国に帰っていった。イングランドに残ったケルト人は、スコット族やゲルマン人がいるうえにキリスト教が入ってきて住みにくい土地を捨てて、アイルランドや、ウェールズや、コーンウォール半島に移り住んだ。

こうして大陸のケルト人は徐々にローマ人やゲルマン人の中に同化し、消えていった。その一方で、イギリスではアイルランドやウェールズに逃げたケルト人がその文化を守り、現在まで語り継がれる伝説や神話が伝えられた⁽⁶⁾。

2. ケルトの宗教的特質

「常若の国のアシーン」をはじめ、ケルトに伝わる神話・伝説群にはケルト人が信仰していた宗教も色濃く映し出されている。この章では背景となった宗教をみていこうと思う。

ケルトの宗教を知る手がかりとしては、まず古代の文献や考古学的資料がある。しかし、ケルト人自身の手による記録は残っていない。鉄器時代のケルト人が文字を持たなかったためである。そのため、残された資料からケルト人について研究する場合、慎重でなければならない。古典期の記録者たちがケルト人を「野蛮人」というステレオタイプのもとに見る傾向にあったからだ。その結果、彼らが描き出したケルト人やケルトの宗教は歪められたものになっていることがある。また、ケルト人の宗教とウェールズやアイルランドの初期神話伝承を、結びつけて研究する場合には、さらに慎重でなければならない。これらが書き留められた時代は、ケルト人が生きたキリスト教以前の時代と、あまりにも離れているからだ。神話の口承伝承は中世になってから文献にされたものが多く、いくつかのテキストにみられる宗教的な相違点を取りあげてみたとしても、それらの文献が人々の間で語られてきたものかどうかはあやしい。中世の修道士たちによる創作部分が多分に含まれている可能性がある⁽⁷⁾。

古代ギリシア・ローマ社会が都市生活を中心としたものだったのに対して、ケルト社会の基調は田園生活にあった。前1000年紀後半から後1000年紀前半にかけてのヨーロッパ、ケルト社会の宗教は、自然と密接な関係を保っていた。たとえば日本にあるような多神教システムと同様に、ケルトで崇められていた超自然的存在は、自然そのままか人手の加わった景観、あるいはその住人たちを反映したものであった⁽⁸⁾。崇拝の対象は特徴のある景観、山、森であり、あるいは動物たちであった。人間や家畜や穀物の多産豊饒に関連づけられる神秘的な自然は、すべて崇拝の対象であった。各部族の支配地域は聖なる場所と受け止められ、死者を受け取る大地は聖なる力に満ちた場所であり、そこに生きる生者によって崇められた。水場の霊は命を与えてくれる存在、この世と他界とをつなぐ存在と考えられている。天空のさまざまな自然の力、なかでも太陽と雷は神的なものとされ、それをなだめる必要があった⁽⁹⁾。

3. ケルトの神々

ローマ以前の鉄器時代の神々を識別しようとする際に、有用な参照例は非常に少ないが、ローマ時代の彫像や奉献辞は、一変しておびただしい数の神々の存在を物語っている。その時代

にケルト人が初めて自分たちの神の名を祭壇や像に刻むようになったばかりでなく、ギリシア・ローマの伝統にならって、神像表現の数が飛躍的に増加したためである。こうした神像には、それぞれの役割を表す特徴的な付属物やシンボルがつけられるようになった¹⁰⁰。

神的な力として最も重要なのは、空と水に関係するものであった。考古学的資料は、太陽と雷が特別に強力なものとして受け止められていたことを示している。古くは太陽を表すシンボルとしてスポークのついた車輪を用いていたが、後に太陽神は車輪で表されるようになった。ローマ人は占領したケルト人の土地に、自分たちの土地の神であるユピテルを持ち込んだ。ユピテルはケルト人の太陽神と混同され、その姿はローマ神でありながら車輪を持つようになった。

ケルト人はタラニスという雷の神も崇めていた。ローマ人の詩人ルカヌスは、人身御供をする野蛮な神だと述べている。

…そしてこのガリア人らは人身御供によって、テウタテース、エスス、タラニスの無慈悲な神々をなだめる。……その祭壇はスキタイ人のディアナ神の祭壇さながら恐ろしく、それを目撃した訪問者は震えあがる。(ルカヌス『パルサリア』1・422～465)

タラニスの名は、イギリス、フランス、ドイツ、旧ユーゴスラビアでみつけた七つの碑文で見られる。そのうちのいくつかではタラニスはローマの神ユピテルと同一視されている。おそらく、どちらも天空の神であり、ユピテルの役割のひとつが雷神であったからだろう¹⁰¹。

ケルト人が水を崇拝していたことを示す資料は数多い。ローマ時代以前の鉄器時代には、各所の湖、川、泉、沼地に、金属器、木製品、動物、ときには人が供物として捧げられた。ローマ時代には、いくつかの水の神の名が碑文や当時の文書に記された。また、自然の泉は癒しの神崇拝の中心でもあった。

神々の中には、部族の境界を超えて信仰されていた普遍神と、部族や地域的なエリアとの関連で信仰を集めていた地域神などがある。前者の普遍神というべき神々に、母なる神、天空の神、馬の神エポナなどがあつた。母なる神は三重の存在を持つものとされていて、三神像として表されることが多かった。一方、地域神には実にさまざまな神々がいる。ガリア北西部の部族レーミー族は、同じ表情と長いひげを生やす三つの顔を持った神の石彫りを作ったことで知られる。この部族の鉄器時代には、三つの顔を浮き出させた硬貨を作っていたが、このようなモチーフはガリアのどこにも他には見あたらない。ほかにトウェリー族が崇拝していたレヌスという神がある。これは多くトウェリー族の聖地に祀られ、一番立派な聖地は部族の中心地トリールにあつた。だが、この神はあちこちに輸出され、遠くイギリスのグロスターシャーやウェールズにも祀られていたそうである¹⁰²。

ケルトの神々の中にはさらに地域が限定されて、たった一箇所の神殿にしか祀られていないものもある。おそらくこうした神はある特別な場所の擬人化だったのであろう¹⁰³。ケルト人は自然の力を世界に欠くことの出来ない要素と考えていた。空、太陽、地面の下の暗い場所は、それぞれが霊を持っていた。山、川、泉、沼地、木々や岩はすべて例外なく霊的存在であった。ケルト人はこうした霊と交流するために日常生活のなかで霊と接触しようとした。食事の用意をするときに食べ物や飲み物の一部を、炉端や家の守護霊に取り分けたり、狩りや戦い、結婚や子の誕生にそなえる準備に際しては、霊への祈りや贈り物の約束がなされたりした。

ローマ時代以前のケルト人が神への祈りを行っていたという証拠はほとんどない。しかし、古典期の記録者の多くが記しているなかには、一種の祈りがあり、帰依者に益をもたらすように神々を説き伏せ、あるいは祝福してくれたことに対して感謝を捧げる目的で祈られた。祈りは聖地においてか、他の崇拜の中心地で祈られたとみられる。祈りの対象としては、神々の像が最も一般的だった。これは、ローマ時代の祭壇や、アイルランドの初期キリスト教時代の石を彫って作られた十字架にあたる。ガリアやイギリスの石の祭壇には、嘆願者の帰依を示す文字が彫られていることがある。そこにはしばしば、嘆願の成就を願う巡礼によって、その石が寄進されたという内容が読み取れる。この場合、ローマ帝国時代のケルト人はローマのしきたりに従っていたことになるが、呼びかける神々はケルトの神であることもあった。

こう見てくると、今日と同様、ケルト時代にも組織的な祈りと個人的な祈りがあったことがわかる。ドルイドと呼ばれる司祭が重要な機会に、部族のために荘厳な儀式を取り仕切った一方で、位の低い祭司たちは小さな共同体のために祈り、また家長は一家の祈りを仕切っただろう¹⁴⁰。

4. ドルイドの組織

ここまでケルトの神々について見てきたが、次は宗教の概要を把握するために欠かせない、ドルイドについて見ていくことにする。ドルイドとは階級の名前であり、司祭のような立場にあるケルトの宗教者を指す。

古代ケルトの祭司たちの最も際立った特徴は、彼らが論理や道徳には関心を持たず、宗教という手段を用いて力を行使したという点だ。占いによって超自然の力をコントロールし、世俗的権力に深く関わり、宗教と政治とが緊密に結びついていた。これはローマ世界にも認められる。ガリアの首長たちの選挙は聖なる場所で、宗教的な儀式を伴って行なわれ、そこには祭司たちや他の部族の首長たちが出席した。

ドルイドについて、カエサルが次のような記述を残している。

ドルイドたちはひとりの長をいただき、長は強大な権力をふるう。彼が死ぬと、残りの者のうち最も信頼のあついで者があとを継ぐが、何人かが同等の者である時は、ドルイドたちの選挙によってか、または武器を持って闘うことで次の指導者を決定する…毎年一定の時期に、彼ら(ドルイドたち)はカルヌーテース族の領地にある場所に集まる。そこはガリアの中心とみなされている。(カエサル『ガリア戦記』6・13)

この記述によって一世紀中頃のガリアでは、ドルイドの長の地位は世襲制ではなく、個人の真価や功績によって選ばれたことがわかる。また、ドルイドたちがどの程度に組織され、ケルト社会にどの程度まで浸透していたのかを知る手がかりにもなる。ここからわかるのは、ドルイドはガリア全体にいて、彼らの間にはある種のネットワークが出来上がっていたということである。

一般にキリスト教の聖職者たちは、一方で神と人との仲介者であり、他方では紛争地域における仲介者などとして、人々のあいだで橋渡し役を行なう。ドルイドも同じで、神々と人間のあいだ、異なるグループ間の仲介者としての役割を果たしていた。彼らの活動において非常に重要な要素だった占いは、超自然の力との交流を成し遂げるための仲介の行為そのものであ

た。

神々と人間との仲介者であることは、世俗の事柄においてもドルイドたちに仲介者としての権威を与えただろう。カエサルは、ドルイドたちがあらゆる事柄についての裁判官、調停者、仲介者であったと記した。彼らが毎年開く集会の果たすひとつの機能もこうしたことにあったとみられる⁽¹⁵⁾。

5. ケルト人の死生観、死後の世界

古代ギリシア・ローマ世界の著述家たちは、ガリア人の死後の世界の観念について特記している。

彼ら(ドルイドたち)の主たる関心事は人々に次のようなことを信じさせることであった。すなわち、魂は死を免れることができ、死後には別の肉体に宿ると。彼らはこのことが人々に勇気を奮い起こさせる最も強い動機になることを理解していた。(カエサル『ガリア戦記』6・14)

ガリアの人々の暮らしを見ると、葬儀は非常に大規模で金がかかるものだ。彼らは、死んだものが生前に愛したと思うすべてのものを火の中に投じる。動物でさえ例外ではない。死者が愛した奴隷や配下の者が一緒に火葬に付されるには、長い時間は必要ない。(同前、6・19)

実際、この記述を裏付けるように、鉄器時代の始まり(紀元前700年)からローマ人による征服の時期まで、死者の生前の持ち物を墓に埋めた例は少なくない。このような習慣がつきものだった先史社会の場合には死者が他界に行くときには身の回りの品をそろえる必要があると考えられていたと、推定される⁽¹⁶⁾。もっとも墓に副葬品を入れるのは、死後の世界の存在を確信していたからとは限らない。死者の持ち物は死の汚れによって生者がもう使えないと考えて、死者ともども埋めてしまうのだとか、副葬品は黄泉の国の支配者に対する贈り物であるとか、異なった解釈もできる。

しかし、アイルランドとウェールズの神話には死後の世界が美しく描かれているものが多く、死者が死後の世界で生活するため、と考えるのがより自然なようである。ケルトの伝説や神話の中では決まって他界は美しいものが満ち溢れ、滅びも病も老いもない、いっそうよい世界なのである⁽¹⁷⁾。

アシーンに結婚を申し込みに来たニアブは、美しい馬に乗っていた。古くはニアブ自身が馬の顔で登場したという伝説も残っているが、異世界からのアプローチに馬が関係してくる背景には、ケルト人の馬の捉え方が関係している。速やかに遠くへ去れる馬は、死者の乗り物と考えられていた。「ニアブとともに常若の国へ旅立つアシーン」は、言い換えれば「女神とともに黄泉の国へ旅立つ死者」ということになる。ガリア地域のいたる所から、疾駆する馬に横座りした女神像が出土している。牝馬という言葉に由来するエポナというこの女神は、ローマにもよく知られ、ガリアから逆にローマの神話体系の中に入ってしまった珍しい例でもある。このことは、この女神がいかに広く信仰された重要な女神だったかということを物語っている⁽¹⁸⁾。

第2章 ケルトの神話と他の神話

1. ケルト神話の分類

アイルランドとウェールズでは、その根幹は同じであっても、発展した神話はいまやまったく別のものになっている。ひとくちにケルト神話といっても、いろいろと枝分かれして、ローマの神話やキリスト教の影響を受けて混ざり合っている部分もある。

地域別に大まかに分けると次のようになる⁽⁹⁹⁾。

(1) アイルランド(10世紀頃にまとまる)

ダーナ神族の神話。後にクー・ホリンという英雄が出る、アルスター神話も生まれる。

(2) ウェールズ(マビノギは11世紀、アーサー王伝説は15世紀頃まとまる)

古い伝承は「マビノギ」と呼ばれる。それらをもとにつくられた物語のひとつが、有名なアーサー王伝説である。

(3) スコットランド(18世紀頃まとまる)

フィアナ神話。アイルランドのアルスター神話から、さらに後の世のフィアナ戦士団の話であり、アシーンの伝説はここに分類される。

これらをまとめて「ケルトの神話・伝説」と呼ばれている。それぞれ物語がまとめられたのが中世になってからなのは、ケルト人が口承を伝統としていたためである。文字として残っておらず、吟遊詩人に語り継がれたり、修行僧の手で残されて生き残ったものしか現代に伝わっていない。

アイルランドに残る神話には、ひとつ大きな特徴がある。神話は地域を問わず、たいてい天地創造の話から始まるが、アイルランドの神話には天地創造の話がない。この世はすでに最初から存在し、そこはエリンといった。このエリンが、アイルランドのことである。神話はエリンに次々と種族がやってくるところから始まる。このことは、10世紀にまとめられた、『侵略の書(レバ＝ガバーラ)』に残されている。それによると、つぎのような順で、五つの種族がやってきては繁栄し、そして滅亡していった⁽¹⁰⁰⁾。

(1) パーソロン



(2) ニュウズ



(3) フィルボルグ



(4) トゥアハ・デ・ダナーン



(5) マイリージャ

4番目のトゥアハ・デ・ダナーンは、女神ダヌ(ダーナ)を母とする種族なので、ダーナ神族と呼ばれていて、そちらが一般的な名称だ。母なる神であるダヌに関する神話は残っていないが、ダーナ神話には豊かな神様たちが登場する。

その神々が四つの宝を持ってアイルランドにやってきて、ひとつ前のフィルボルグ族に島を譲るように迫り、戦争になった。ダーナ神族の大將ヌアダはこの戦いで片腕を失い、フィルボルグと相討ちして島を分け合い、和平を結んだ。

その後、ダーナ神族は長い間アイルランドを支配していたが、そこへ五番目の種族が入って

きた。マイリージャ族とは、人間のことだ。もちろんケルト人である。人間たちはダーナ神族を滅ぼし、滅ぼされた神々は地下にもぐって妖精になったそうだ。その地下の国の名はティル・ナ・ノーグ(常若の国)ということだ。

2. ギリシア・ローマの神話との比較

インド・ヨーロッパ語族共通の起源的神話は、言語と同様、独自に変化しつつ進化していった。その結果、ケルト人の幻想的な神話と、地中海の神話にはほとんど共通点が残っていない。ギリシア人の神話と宗教を特徴づけているのは秩序と均衡と節度の理想化である。神々の社会は厳密に階層化されていて、頂点には秩序を司るゼウスが君臨し、そのもとに固有の権限を持った神々が存在している。商業の神、芸術の神、愛の神など、それぞれに役割が定まっていて規則正しく秩序だっている。

一方、ケルトの神話では、ギリシア神話とくらべると神々は階層化も専門化もされていない。ケルトの神々は神話の中で、冒険に生き、決して限定されたひとつの役割に閉じ込められることはない。宇宙の秩序や平衡を維持することとは違うことに関心を抱いている。ケルトの神々と他の神話の神々を結びつけることの無意味さを指摘したヤン・プレキリアンの文章を次に引用する。

貧困な想像力しか持ち合わせていなかったローマ人は、ケルトの神々を彼らの神々と同一視することしかできなかった。カエサルは《ルーグ》をメルクリウス、《オグミオス》をマルス、《タラニス》をユピテルと呼んでいる。しかし、ルーグは一度も商業の神だったことはなく、オグミテスも戦争の神などではなかったし、タラニスにしても神々の王などでは決してなかった。彼らはそういう特徴を持つこともあったが、それはほんの一面にすぎない。そして、染み付いたラテン的思考から自由になれない現代の一部の神話学者も、これと同じ誤りにおちいつている。“ローマ的解釈”が無意味であるとわかると、彼らは次にゲルマンの神々をダブらせ始めた。しかし軍隊のように階層化されたゲルマンの神々と、ケルトの“万能の”神々との間にどんな共通点を見出せるというのだろうか。ケルトの神々の性格を、他の民族の神々と結び付けようと試みても全く無駄というものである。ケルトの神々は他の何ものにも似ていないのだ²⁰。

ケルトの神々と、ローマ・ギリシアの神々との大きな相違点は、その住処に関してではないだろうか。ローマ・ギリシアの神々は人間社会に似た非常に組織化された社会を形成しているが、人間界からは遠く隔たっていて容易には近づきにくい山々の頂上(オリンポス山)に住んでいた。しかしケルトの神々は地上や海中に住み、進んで人間に関わっていて、神の世界と人間の世界が浸透しあう様が神話に描かれている。

第3章 物語に共通するモチーフ

1. 美しい女性の登場

本章では「常若の国のアシーン」に描かれた三つのモチーフを詳しく考察する。まず初めに、美しい女性の登場について論じる。美しい女性の登場というのは、異類婚姻と言い換えることもできる。昔話や伝説には、異類と婚姻関係を結ぶというモチーフを持つものが大変多い。異

類婚姻譚は「異類女房」と「異類婿」、二つのタイプに大別できるが、妻となるものが異類の場合、そのほとんどすべてが美しい容姿をしている。「異類女房」に見られるのは蛇、蛤、鶴、狐、天女、乙姫など。「異類婿」には蛇、蛙、鬼、神などがある。「異類」とまとめてはいるが、その内容は神格化された動物だったり、神であったり、さまざまだ⁽²⁰⁾。

アシーンは、常若の国から来た絶世の美女ニーアヴに心を奪われ、仲間の引き止めるのも聞かずに旅立つことを決める。ニーアヴの美しさは次のように描かれている。

フィンも騎士たちもみな、狩を忘れ、驚いて、この世のものとも思えぬほど美しいその乙女に見とれてしまったのです。細い金の王冠が頭に光っていました。金の星が光る茶色の絹のマントは、金のブローチでとめてあり、地上を覆い尽くすほどすそを長く引いていました。肩には金の髪が波打ち、目は青く澄み、その白い手で白馬の手綱を握って、レイン湖の白鳥のように優雅に馬の背に座っていました。白馬にもマントが着せられ、銀のあぶみがついていました⁽²¹⁾。

髪や瞳、身につけているものの美しさが詳細に描写されている。この「美しさ」というのが異類婚姻を考える上で重要な鍵となる。

昔話や伝説の中で、人物の描写というのはまず、美しいか否かがはっきりと明記されている場合が多い。その方が聞き手にとってイメージしやすいという理由もあるだろうが、「美しくて気立ての良い者」が幸せを手に入れ、逆に「美しくても気立てが良くない者」あるいは「醜くて気立てが良くない者」は、自らの悪行によって損害をうける、というのも多くの物語に見られるパターンである。「異類女房」は例外なく「美しい女」の姿をして現れ、その美しさや気立ての良さで人間の男の心を射止める。

では、なぜ異界の女たちは美しいのだろうか。乙姫やニーアヴの原型は異界の神である。古い文献になればなるほど神の世界と人間の世界が分けられ、その違いが顕著に描かれている。人間の女性というより女神である彼女たちは、人間との違いを表すために美しく描かれる必要があったのだろう。また、人間が異界に対して感じていた憧れや畏怖の念も込められていたのではないだろうか。ケルト人の異世界に対する想いについては第1章でも触れたが、彼らにとって異界への入口はいたるところにあり、親しみやすい存在であった。しかし同時に異界に対するの恐怖心も持っていた。非日常的世界である異界は人々の想像を掻き立てるものだっただろう。だからこそ、かれらケルト人の文化には妖精があれば息づいているのだ。その異界から人間界へ、アプローチしてくる使者にはただならぬ、人間らしからぬ、人を虜にする、美しい容姿が必要不可欠だったのだろう。その反面、美しさが表すのは憧れだけではなく、畏怖の念でもあったに違いない。人々は神々が住む異界への恐怖を、女の美しさに込めた。美しさというのは、良いものであるとは限らない。得体の知れないという恐怖を表すものでもあるのだろう。

次に、迎えにくるのが女性であるという点に着目してみたい。世界のいろいろなところに浦島・アシーン型の異界訪問(異なる時間が流れる世界を訪れること)の伝説が存在しているが、どの話でも異界を訪れるのは男性であって、そして訪ねる先はほとんどが女性が主として暮らしている国であり、女性だけしかない場所に迷い込む話も少なくはない。田中仁彦氏は『ケルト神話と中世騎士物語』で、「若い女たちだけの国、それは男どもの身勝手な空想の世界なの

であろうか」と問いを發し、その答えとして次のように述べている。

このようにして、自身は隠れた存在である大地母神は、彼女の分身である女神たち、大地の示すさまざまな相貌に対応する女神たちとなって現れるのであるが、ここまで見てくればもう、ケルト人の「他界」がなぜ女人たちの国であるのかという、先に出しておいた問いへの答えはおのずから明らかであろう。生命を生み出す大地はまた死者たちの帰ってゆく所である。そしてそこは大地母神の支配する国であり、大地母神の分身もしくは臣下たる女神たちの世界なのだ²⁴⁾。

世界中には多くの、異なった文化を持つ民族が住んでいるが、その神話の中に登場する大地の化身はほとんどが女神だ。田中氏によれば他界はその女神の支配する国なのだから、女性しか存在しないのは当然ということになる。これは、主人公を誘いにやってくる登場人物が女性の姿をしていることの説明になる。

次に、女神が特定の男性を誘いに来るモチーフについて浦島物語とケルトの伝説を比較している土居光知氏の論文「うた人トマスと浦島の子の伝説—比較文学的研究の試み—」(土居光知・工藤好美『無意識の世界—創造と批評—』)から引用する。

この女神の万物を育成する生命力を一層盛んならしめんがため、各地方の人々は、選ばれた美少年と、女神との結婚を祝う、原始的な祭礼を催し、その年々の豊穡を確保せんとした。(中略)アッシーンの伝説とトマスの伝説とを併せ補うと、浦島伝説のすべての成素が整う。三人ともに木の下か、柱の下(舟には帆柱が立っている)で眠っていると、夢の中で、容姿美しく、比ぶべきものがない仙女が現れ、仙女はこれらの美少年を寵愛し、神仙国に伴う。(中略)浦島の子物語の背景には古代宗教の雰囲気と行事が感じられる。浦島やトマスやアッシーンとひとしく、郷里において契りを結び、女神に伴われて神仙郷に入り、女神に奉仕するのであって、その点が第一にほかの異郷滞留物語とは異なっている。その結婚は、サイキとキューピットとの結婚のように、世俗からの絶縁を意味し、父母に再会したいという念願を口にするによっても、神人の関係が危機に当面する²⁵⁾。

土居氏の説を要約すると、次の3点になる。

- (1) 太古ギリシアやバビロニアには大地の女神に豊穡を祈願して美少年を選出し、彼女らと結婚させる習慣があった。
- (2) 後にウェールズ地方に赴いた兵士たちによって、これらの観念がケルト人の間に持ち込まれた。
- (3) そして、アッシーンや歌人トマスの話が出来上がった(影響を与えた)。

土居氏の説の要点は、かつて豊穡を祈願するために大地の女神に若者をささげる儀式があり、現在私たちが知っている女性が迎えにくる伝説は、その宗教儀礼を反映したもの、ということになる。つまり浦島やアッシーンは本来女神が迎えにくる話ではなく、逆に男性が豊穡祈願のために女性(大地の女神)にささげられる物語であったが、それが長い間に変容して女性が迎えにくる伝説になったというわけである。

2. 異世界への訪問

昔話や伝説はすべて日常生活の中に非日常的世界が介入するところからドラマが始まる。日常の世界と非日常の世界、つまり異界が接触することによって語るべきドラマが展開していくのである。では、その異界とは、物語の中で何を意味しているのだろうか。

浦島太郎とアシーンがそれぞれに訪れた世界に共通しているのは、時間の流れの異常性である。「常若の国のアシーン」では、ティル・ナ・ノーグ(Tir na n-Og)と呼ばれる国がそれにあたる。そこでは老いている者は次第に若返り、死も苦しみもないという²⁸⁾。浦島物語では男が海の中の宮へ行くが、帰還して初めて時間の流れが食い違っていることを知る。時間の流れが異なるこの異界は、神の世界である。アシーンが常若の国へ到着し、芝生へ足をおろすと、体の色が変わり、額のしわが消え去り、体に力がみなぎったという²⁹⁾。これはアシーンがもはや人間ではなく、神格化したという描写であると考えられる。アシーンの物語では、常若の国が神の国であるという表記はないが、アシーンの物語が含まれるフィン物語群も、ほぼ全ての物語でフィンが超自然的な生き物や出来事と関わっている。

物語の中で異界を表現するのに欠かせないのが、川、海、池などの水の描写である。アシーンは常若の国へ海を通して辿りついた。浦島物語でも、海の中の世界へ主人公が訪問する。他に、日本の物語では「桃太郎」「瓜子織姫」では神の申し子が、川を流れてくる桃や瓜の中に入っている。「猿地蔵」では、こちらの川岸に寝ているおじいさんを、猿たちは向こう岸にある地蔵堂から抜け出した地蔵と見て、川を渡って向こう岸に運ぶことになる。「牛方と山姥」では、牛方は川を漕いで向こう岸の山中にある山姥の家へ辿りつく。これらの川の意味するところは、明らかに日常的世界を非日常的世界から引き離しておくための境界線ということだろう。「竜宮女房」でも川の水神が登場し、「金の斧、銀の斧」でも湖から登場するのは神である。物語の中で、水と神とは密接な関係を持っているようだ。

ここで主人公の異界訪問、海が神の領域であるという点に注目したい。伝説や神話においては「異界＝神の世界」であるといえる。人間が神の世界へ。これは、現世での死を意味する。浦島が玉手箱を開けて老人になってしまったように、アシーンも馬からおりて老人になってしまった。一度神の国を訪れたものは、もう人間としての生活は取り戻せないのだ。

男たちが訪れる異界は「神の世界」であり、またそれは「死後の世界」であることも意味している。主人公が異界を訪れて帰ってきてみたら、本人は僅かの間だと思っていたのにこの世では十数年、あるいは数百年が経過していたという話は、世界中いたるところにつたえられている。たとえば、スウェーデンの民話「坊さんと小鳥」である³⁰⁾。あるお坊さんが、美しい声で鳴く小鳥の後を追いかけるうちに美しいばら色の世界に迷い込んでしまい、小鳥の声がやんだと思うともとの修道院に戻っていた。しかしそこはお坊さんがいた時代から百年も後の世界で、それを知ったお坊さんは悲しみで死んでしまうのである。また、スイスにもパラダイスを訪れた少年がたった一日と思っていたのに三百年もたっていたという話がある。共通して時間の流れが消滅していて、その世界では死者たちは老いることも病気を患うこともなく、生きるための労働もない。季節は常に春か夏で、天候も良く、木々はいつでも果実をつけている。この穏やかな世界は、ケルト人の死後の世界への考え方を反映しているに違いない。

3. 禁忌

浦島太郎は現世へ戻り、300年の時が経ってしまったことを知り、寂しさのあまり「開けては

いけない」と手渡された玉手箱を開けてしまった。アシーンは、自分と比べてあまりに弱々しい人々に手を貸そうとしたところ、「降りてはいけない」といわれていたのに、馬から大地に降り立ってしまった。どちらも、帰郷を願った主人公に女神が「してはいけないこと」をひとつ与え、その禁忌を犯した主人公が老人になってしまうという同じ結果で物語は終わる。

これは約束を守らなかった罰を受けたとして解釈することもできるが、なぜそのようなタブーが必要だったのかという疑問が残る。子どもの頃浦島太郎の話聞いて、最後によぼよぼのおじいさんになってしまった浦島をかわいそうに感じたり、そんな玉手箱を乙姫は何故わざわざ土産に持たせたのかと不思議に思った人もたくさんいるだろう。

異界とこの世の間の壁が、この禁忌のモチーフにあらわれている。老人になったのは、浦島とアシーンの人間としての時間の流れが一気に正常に戻ったためと考えられ、禁忌の侵犯という主人公の不徳とは別に、絶対に乗り越えることができない壁の存在を、時の壁としてモチーフにしているのだ。

おわりに

ケルト人の宗教観や「異類婚姻」、「異世界への訪問」といったモチーフに焦点を合わせてアシーンの物語を読むと、「死と再生の物語」であることが見えてくる。主人公は異世界との接触によって死ぬが、そこから再び人間界へ立ち返る。死者が神の国へ行くという考え方は古くから日本にもあり、『古事記』にもイザナギ、イザナミの話として伝えられている。海が信仰の対象であったのもケルトと日本の共通するところであり、二つの文化の異界観、死生観に似通った部分があることがわかる。

世界にはとても偶然とは思えないほど似通った話が各地に存在していて、ひとつの話がある土地から他の土地へ伝播したという説が唱えられている。浦島伝説とアシーンの伝説だけが似ているというならば偶然の一致とも考えられるが、ケルト伝説・神話の中には日本のものとそっくりなものが他にもあり、伝播説に強く説得力を感じる。例をあげると、まず、ケルトの「大王と大男の娘」という昔話がある。この話は『古事記』の「大王主の娘の国訪問」にそっくりである。もうひとつ、ケルトの「ノックグラフトンの伝説」は日本の『宇治拾遺物語』の中に見られる「こぶとりじいさん」ととてもよく似ている。日本の場合、これらの話は古代・中世に記された書物の中に記載されているのだから、最近伝わってきて根付いたもの、というわけではない。これらの話が同時期に、同一の方法で伝わってきたとは思わないが、何らかの方法で伝播してきたのではないかと、あれこれ想像させられてしまう。私たちの持つ神話・伝説とこれほど似通った物語が伝えられていると思うと、ケルトというはるか遠い異国の地に、不思議と親近感が湧いてくる。

世界の伝説や神話は、それぞれにいろいろなメッセージを私たちに伝えようとしている。長い時代をかけて伝えられるうちに少しずつ変容しながらも大切に守られ、今を生きる私がめぐりあえた話の数々は、いまだ人をひきつける魅力に溢れている。

註

(1)「ブラーンの航海」や「真実の詩人トマス」など。

(2)原英一『お伽話による比較文化論』松柏社、1997年、128-141頁。

(3)井村君江『ケルトの神話 女神と英雄と妖精と』ちくま文庫、1990年、213頁。

- (4)市原悦子監修、桔梗泉編集『子どもに語る日本昔話』主婦と生活社、2000年、336-338頁。
- (5)井村君江『ケルトの神話』ちくま文庫、1990年、49-148頁。
- (6)インターネット<http://enkan.fc2web.com/minwa/urasima/>
- (7)ミランダ・J・グリーン、井村君江監訳、大出健訳『図説ドルイド』東京書籍、2000年、34-35頁。
- (8)ミランダ・J・グリーン、前掲書、38頁。
- (9)ミランダ・J・グリーン、前掲書、88頁。
- (10)鎌田東二、鶴岡真弓編著『ケルトと日本』角川書店、2000年、28-29頁。
- (11)ミランダ・J・グリーン、前掲書、41頁。
- (12)ミランダ・J・グリーン、前掲書、43-46頁。
- (13)ミランダ・J・グリーン、前掲書、42-45頁。
- (14)ミランダ・J・グリーン、前掲書、41-45頁。
- (15)鎌田東二、鶴岡真弓、前掲書、41-45頁。
- (16)ミランダ・J・グリーン、前掲書、107頁。
- (17)鎌田東二、鶴岡真弓、前掲書、46-59頁。
- (18)長田ふみと『浦島太郎の謎』文芸社、2002年、168-169頁。
- (19)井村君江『ケルトの神話』44頁。
- (20)井村君江『ケルトの神話』49-148頁。
- (21)ヤン・ブレキリアン、田中仁彦・山邑久仁子訳『ケルト神話の世界』中央公論社、1998年、52-53頁。
- (22)高橋康雄『結婚の原型 異類婚譚の起源』北栄社、2001年、61頁。
- (23)井村君江『ケルトの神話』214頁。
- (24)田中仁彦『ケルト神話と中世騎士物語』中央公論新社、2004年。
- (25)土居光知、工藤好美『無意識の世界—創造と批評—』研究社、1966年。
- (26)フランク・ディレイニー、鶴岡真弓訳『ケルトの神話・伝説』創元社、2000年、168頁。
- (27)インターネット<http://enkan.fc2web.com/minwa/urasima/>
- (28)竹下景子監修、桔梗泉編集『子どもに語る世界昔話』主婦と生活社、2000年、362-363頁。

(卒業論文指導教員 金山愛子、神田より子)